

冰

12
2022

第4000期(2022)



雨の歩幅

能村 研三

綱渡りの一年

もう一年を振り返る季節になってしまった。

昨年の今ごろはコロナの感染状況もやや下火になっていた頃で、延び延びになっていた「沖」の創刊五十周年記念大会を、一月に新年大会も兼ねて実施しようと計画を始めた。ところが年が変わる頃から第六波が押し寄せ、一月下旬の大会の実施を延期せざるを得なくなった。

次の実施時期をいつにするかの判断に迫られたが、中々感染者が減少に至らず、先延ばしをするしかなかった。

先師登四郎の忌日である五月二十四日あたりで大会を開催しようと、五月二十二日を選び準備に入った。幸い感染者数は減少傾向にあったが、内輪のささやかな会とし、会員と共に記念すべき五十周年を祝うことができた。

この大会に花を添えてくれるかのように、句集『神鵝』で「俳句四季特別賞」を戴くことになった。こちらは七月七日、俳句四季の「七夕まつり」で

宵闇や灯さず過ぐる貨車の列
雨の日は雨の歩幅や蓼の花
曼珠沙華白にも毒の淡からず
秋風を聞くに適へる耳かたち
風紋の秋風なりに流れをり
忠敬と芭蕉の蹄秋澄めり
鳴り急ぐ秋の風鈴はづしけり
度忘れの一語蓮の実飛びにけり
槍投げの力が声に雁渡しし
田終ひの煙が目安夕歩き

二年ぶりの俳壇交流の機会を得た。その翌日に安倍元首相の銃撃事件があり、世の中に不穏を与える前の日の実施であった。

今年はまだ講演の依頼が多かった年で、春には俳人協会の「第一句集を読む・上田五千石の『田園』」秋には松山の子規記念館で「子規の房総の旅」について話をした。この子規の房総の旅については夏休みの数日間をかけて実際現地の取材をしたことも楽しかった。十一月十三日には宮城県の「松島芭蕉祭」、十九日には長野県信濃町の「一茶忌俳句大会」での講演が控えている。

十月二十三、二十四日には「青森支部発足記念大会」を実施、全国の会員と共に祝うできたことも嬉しかった。

コロナ禍の様々な制限がありながらも、綱渡りをしながら実りある行事ができたことはよかった。

悪知恵の方へ転がる胡桃の実
煙茸噴かせ踵を返しけり
蠟螂の斧の錆びつく雨催
柚子挽ぐに棘の一撃喰らひけり
数珠玉の乾び音郷の滅び音か
じよんからの泣き音に崩る雁の棹
父母に逢ふため天の川遡る

「青森支部発足記念大会」が盛会のうち
に終了した。関東の方から参加した方々
は久しぶりの遠出とあって、前泊やら後
泊やらと紅葉の季節を楽しんだ人も多
かった。私も後泊組となり八人で観光タ
クシーに乗り、青森駅から太宰治の斜陽
館へ、そして十三湖を回り竜飛岬への
ルートを辿った。車内の雑談も楽しく弾
んだが、夕光の津軽平野に薄らと棚引く
煙を眺めては、「煙を見ると安らぐのね」
とか「何かほっとするのよね」と、しば
らくしみりとした優しい気持ちに浸っ
ている。

登四郎先生に「煙もまた黄落の景の一
つとす」という御句がある。当時は消防
法等も厳しくなく公園などの落葉焚かも
知れないが、八甲田山の黄葉やみちのく
の田仕舞の景色に触れた身には、先生の
御句がいつそう親しく感じられるのであ
る。

蒼茫集

眠らねば

栗原 公子

* 眠らねば今日のをはらず鉦叩
灯を消して窓に切りとる星月夜
秋声のひとつにペンの走る音
夕かなかな水洗ひして眼鏡澄み
虫時雨シャボンの泡に顔うづめ
自由欲りしか鬼の子の揺れやまず

一志にて

千田 百里

野萩叢ついで抱き起したくなりぬ
周りよりしやんとしてをり吾亦紅
秋渴き兵糧のごと書を積みみて
酔芙蓉然れば男時といふがあり
ほろ酔の歩や月光に裁かれて
* 一志にて一師一詩や秋澄めり

分厚き夜

辻美奈子

* 榎植の実分厚き夜を纏ひけり
野分立つ雲の底ひの夕あかり
あをあと浮かぶ静脈十三夜
あめつちのあひだ芳し稲架襖
案外に短気な人よ鯊を釣る
交々に等しく冷えてすれ違ふ

爽 籟

細川洋子

風力発電電爽籟を研ぎ澄ます
回転扉まで付いてくる赤とんぼ
釣瓶落しや船宿の仄明り
鉦叩こむら返りになすがまま
* 回想に濃淡ありし秋の虹
石鹼の丸く減りゆく虫の闇

蓮は実に

甲州千草

* 蓮は実に亀より亀のこぼれたり
落葉搔まづは大樹ををろがみて
枯蟪蛄日照雨に少し鎌を振る
長短の紐に始まる七五三
杉玉の新旧称へひやおろし
器みな仕舞うてよりの十三夜

脇 役

町山公孝

野分雲ドクターへりに空譲る
* 脇役に脇役のいろ吾亦紅
奥飛驒に朝のかをりや水の秋
小鳥来る被災道路の仮舗装
なあんにもしないですす小春かな
秋しぐれ織部茶碗の笹模様

潮鳴集

朴落葉

兵藤

惠

羽

化

菅原健一

魚棲めば容定まる秋の水
* 朴落葉芯に覚悟の巻いてある
川風に吹かれてゐたる芋煮会
女川に鏡花の生家濁り酒
湯を足して布巾沈むる寝待月

葡萄吸ふ少女は羽化を待つてをり
燕去り全き無人駅となる
十月の三日月研いでみたくなり
青柚子や男言葉の女の子
* 水のなか水湧き出でて水澄めり

旅程表

平松うさぎ

気

泡

朝長美智子

身に添うて矜恃の芯の秋扇
馥郁と種ある身ぬち桃吹けり
* 口伝とふ知恵を絶やさず柘榴の実
人間ピラミッド秋天穿ちけり
小鳥来るちちの手帳の旅程表

* 文鎮のガラスに気泡九月来る
秋澄めり紺碧に置く島ひとつ
母の世の厨小暗し新豆腐
溶岩聳ゆ雲仙郷に水の秋
噴煙の山に向きたる捨案山子

金色

川高郷之助

風は秋

五十嵐章子

金色を濃くして稲田暮れ初むる
* 微力なれど無力に非ず草の花
秋澄むや押印不用てふ不安
建売の大きき同じ秋うらら
口論に負けてさつぱりとろる汁

新涼やめざす山並み雲速し
* ひとりとは孤独で自由吾亦紅
風は秋こんな所で名を呼ばれ
遠ざかる島の栈橋秋の空
九月尽誰かに電話したき夜

紅葉

鈴木齊夫

能の火守り

須賀ゆかり

いとど鳴く置屋の跡の細格子
溪流のしぶきに染めし紅葉かな
旅の酒酌む止め椀の鱈汁
* 暮れ秋の戸毎に古りし十団子
かりがねや遥か遠流の島灯り

神域の走り根を踏む秋思かな
指の間を零るるひかり白式部
* 秋晴や園丁ざざと水を掃く
少年は能の火守りに月今宵
山々に秋冷潜むマタギ村

涼新た

鈴木浩子

ひよひよと

古山智子

真青なる竹の井戸蓋涼新た
素読講座始まる秋の学問所
味の素使ひし昭和身に入めり
真向へば面おそろしき鬼やんま
* 沢村貞子ならばきちんと柚子使ふ

* ひよひよと光へ伸びて貝割菜
すがらねば生きてはゆけずぬのこつち
太郎冠者投げ飛ばされし夏狂言
しなやかに風かはすなり糸とんぼ
サルビアの味を教へてくれしひと

飛鷹選評



能村 研三

満月のやうな女神画棟方忌

藤野 武彦

女性や菩薩の姿を描いた力強い板画で知られる棟方志功の忌日は九月十三日。今年の十五夜は九月十日であったから、志功の忌日の頃にはまんまるの月を見ることができたようだ。先日青森に行った時、間もなく閉館となる棟方志功記念館を観たいと思っていたが、残念ながらそれが叶わなかった。志功が描く女性像はふくよかな顔立ちでやさしい眼差しが美しい。

汀女忌や母と重なるかつぼう着

河野 智子

前句に続いてこの句も忌日を詠んだ句。中村汀女の忌日は九月二十日。汀女は昭和期に活躍した女流俳人。4Tの一人で、普通女性の職場は家庭であり、仕事の中心は台所であるとして家庭婦人の生活を肯定した。作者も汀女やお母様のように台所での仕事に誇りをもって割烹着を着ながら仕事に励んだ。

魔性秘め群るる紅蓮の曼珠沙華

高木 春夫

曼珠沙華は天界に咲く赤い花を表す梵語で、墓地の近くにみられることから彼岸花の名がある。毒があるといわれていて、群れて咲く紅蓮の咲きふりはどこか魔性を秘めている。

裏木戸へ母の声とも秋の声

久間 早苗

「秋の声」は抽象的な季語で、秋になると物音も敏感に感じられ、雨風の音、物の音、すべてその響きはしみじみと胸に染入る。勝手口に通じる裏木戸は母がよく利用していた所で、どこからとなく母の声が聞こえてくるような気がした。

月まつる一草一果庭のもの

笠井 令子

中秋の名月には昔から庭に祭壇を設けて、その季節の草花や果物を供えた。都会であるとその供え物も店で買ったものになるが、作者はご自分の庭から取ってきた草花と果物を供えた。心のこもったお供えである。

無患子のつぎつぎに落ち音楽寺

浜田はるみ

無患子は寺社によく見られ、昔は念珠にしたので、菩提樹とも言った。秋になり黄葉した葉が散っても、枝には黄色の実が残り、互いにぶつかり合って音を立てる。音楽寺は秩父にある寺、次々に落ちる実がまるで音楽を奏でているようであった。

魼竹の乱れも湖景鴨来る

枇杷木 愛

琵琶湖の風景であろうか。魼は定置漁具で、魚の通る道に、何本もの青竹を迷路のように挿し、外側から竹や葎の実、魼簍を張り巡らす。鴨がやって来ると、竹簍が乱されることもあるが、それもまた琵琶湖の風景の一つである。

水栓の残る更地や月天心

川崎登美子

天心に月が輝く中、近所を歩いていたら知らぬ間に更地になっている場所があった。月光の下、敷地の隅に水道の水栓が残っていて、これから新築されてまた新しい家族が戻って来られることを思った。

沖作品



能村研三選

*満月のやうな女神画棟方忌

千葉

藤野 武彦

断捨離の終へし月見の四畳半

夢二式美人しなやか貴船菊

京橋や新藁匂ふ和箒舗

後の月会津盆地を眠らせて

一斉に陽を恋ふ土手の彼岸花

*汀女忌や母と重なるかつぼう着

たましひの吸ひ込まれさう星月夜

影踏んで追うて追はれて良夜かな

喜寿傘寿集ふグラント天高し

*魔性秘め群るる紅蓮の曼珠沙華

木も草も自ら変はる秋の山

風吹かば消えゆく定め芋の露

午後の組午前と替はる運動会

大分

河野 智子

*月まつる一草一果庭のもの

山梨

笠井 令子

*裏木戸へ母の声とも秋の声

埼玉

久間 早苗

添水鳴る能開演を待つ夕べ

篝火やシテの早舞月今宵

ありし日の声思ひ出す後の月

をみな二人草虱の裾払ひ合ふ

析の実の拾へば艶の増しにけり

旧道の踏みしだかれて葛の花

ひとつぶの葡萄は笑みをはじけさせ

実石榴や割れていのちを溢れさせ

実石榴の割れて秘密を開ざす家

裏庭の柿一本のたわわなる

風の吹く里を後にす桐は実に

*無患子のつぎつぎに落ち音楽寺

木の実降る降る子供らの声を乗せ

静岡

高木 春夫

埼玉

浜田はるみ